

貼りかさねるガラス

ガラスはその特性から割れやすく、ヒビが入ると止むことが効かず、全壊に至る。このイメージから、20世紀建築には、ある種の危うさ・不安が包み込まれていた。竣工後、のちの変化に対して、取替えるしかない更新性の低さも含まれている。

21世紀の、これからの社会に求められる「しなやかで強い」というテーマから、従来のガラスのイメージを払拭する、「冗長性」をもつ建築のアイデアとして「貼りかさねるガラス」を提案する。

この建築は、簡単に曲がり、ねじれに強いガラスを「貼りかさねる」ことで、構造と開口部が、パッチワークのように構成される。厚くかさねられた場所は、透明度が低い、構造部になる。薄い場所は、外と視覚的に繋ぎたい部分として開口部となり、また布をめくるように開口部もある。

そのガラスは、いつでも一枚一枚貼り付けることができるため、環境や機能の変化に、柔軟に対応できる。「貼りかさねる」ことで機能を付加していく建築は、外部とのレスポンスにより小さな更新をかさねながら、その全体性を担保する。

□アナログで、スマートかつ感覚的な建築

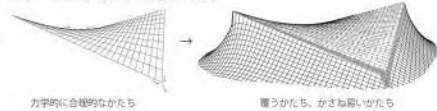
人は古来より、シェルターとして雨水を、いかに効率的に排水するか、形状に最適化する素材や構法を使うかを模索してきた。それは、人の手によってつくることがあるため、ある大きさ、素材の調達（成熟）、更新等後方的な要素により、組み出された知識であった。

「冗長性」を内包するには、このようなアナログかつスマートな体験的感覚、自ら更新可能である、というイメージ・感覚を与える建築が求められる。

また現代では、例えばアスファルトシングルは、部材を貼りかさねることで、防水層をつくる。「貼りかさねるガラス」もこのように、防水が破れても、また貼りかさねることで機能更新できる冗長性の高さを有する。

□柔らかい建築のかたち

HP シェルや EP シェルなど、加えられた荷重を圧縮軸力に変換する力学的に合理的な形態とし、荷重が集中する危うい構造ではなく、荷重を分散して、一面が壊れてもその他が負担する冗長性の高い構造とする。また、貼りかさね、形状に追従しやすい、一枚の布が、厚いかさねる形とする。ある部分は構造体、または外皮となる関係が進展して構成される。外部との境界を僅かにたるませることで、ガラスの反射や屈折により、周囲との盡した異方・関係ではなく、ゆらぎを生み出す。



□かさねる構法

かさねる構法としては、組構法に代表されるように、上に積みかさねる構法が一般的だが、外と内の境界が強くなる。そのような硬直した関係性ではなく、これからの建築は、薄いところ、厚いところが必要に応じて連続する皮膚のような外皮に近づき、環境と調和する。ガラス同士を接着剤で貼りかさねることで、接着力により抵抗する、層を形成する。



□断面図

